

注意点1



理論

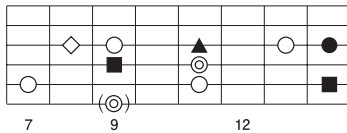
テンション音を加えて
超絶感を生み出せ!

このメイン・フレーズは、リッチー・コッツェンの手癖とも言えるテンション音を加えたコード・トーン・プレイになっている(図1)。このようにトライアドにテンション音を数多く加えると、コードの明暗を決定する3rd音の存在感が弱くなり、コード感が薄れていく。そのため、聴き手に“ここでは一体何を弾いているのだろうか?”という良い意味での違和感【註】を与えられ、ジャズ/フュージョン的な洗練された超絶感を生み出せるのだ。ただし、フィンガリングが通常のトライアド・フレーズよりも複雑になるので、使用ポジションを事前に頭に入れておかないと音をスムーズに繋げられない。したがって、ポジションをしっかり覚えるように心掛けよう。

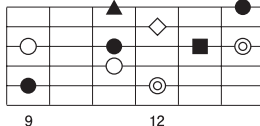
図1 テンション音を加えたコード・トーン・ポジション

◎ルート音 ●6th音 ■7th音 ◇9th音 ▲11th音

C#m (メイン・フレーズ1小節目)



A (メイン・フレーズ2小節目)



TAB譜を目で追いながら弾くのは大変なので、手癖になるくらい弾き込もう!

注意点2



左手

力み過ぎは絶対NG!
無駄のないタッチで発音せよ

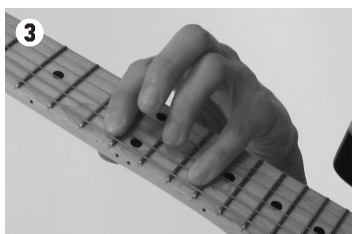
メイン・フレーズのラストには、超高難度な下降レガートが登場する(写真①~④)。ここでは基本的にピッキングを一切行わないので、左手で弦をしっかりタッピング&ブリングするように心掛けよう。ただし、音をハッキリ出そうと意識するあまり力を過度に入れたフィンガリングを続けると、腱鞘炎になる恐れがあるので注意すること。ギターはある程度の力で指板を叩くと“コン”という音が鳴るが、力をそれ以上入れても音量は変わらない(特に歪ませた音では、軽いタッチでもサステインを得られるので)。したがって、この下降レガートでも左手をリラックスさせて、指先がハネるような感覚でタッピングしてみてほしい。慣れるまで何度もくり返し練習してみよう!



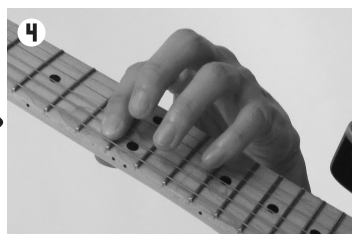
4小節目3拍目。3弦を人差指で押弦して……



薬指のタッピングのみで4弦13fを鳴らす。



小指と同時に人差指も5弦に移動することで……

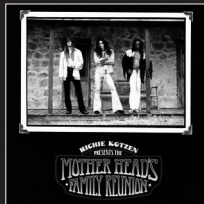


続くブリングもスムーズに行なうことができるのだ。

~コラム20~

教官の戯れ言

実は著者が初めてリッチー・コッツェンのプレイを観たのは、彼の教則ビデオだった。そのビデオでは今ではほとんど弾かないアーミングなども披露していたのだが、やはり超絶エコノミーに最も目を奪われたね。著者から見ると彼のレガートの弾き方は、サトリアーニの弾き方に近い印象がある。2人とも手が非常に大きいので、やはりレガートを弾く上では大きな手は有利なのかもしれない。その後、彼とはギター・セミナーで直接会うことになったが、ギターをアンプに繋いで、ツマミをちょっといじっただけでCDと同じサウンドを出していて、本当に驚かされたね。

著者・小林信一、かく語りき
リッチー・コッツェン編リッチー・コッツェン
『マザー・ヘッズ・ファミリー・リユニオン』

1994年に発表したソロ作。R&Bを土台にしたアメリカン・ロックをシンプルなサウンドで聴かせ。彼のソウルフルな歌声も秀逸。

MR.BIG
『ゲット・オーヴァー・イット』

コッツェン加入後にリリースした5枚目。テクニカルな要素を残しながらも、よりブルース色を強めた彼らの充実作になっている。

【良い意味での違和感】ジャズ系ではスケールやリズムを意図的に外して、サウンドに独特な変化を付けることがある。音楽理論はもちろんのこと、センスも必要になる高度なプレイなので、いろいろな音源を聴いて研究してみたい。